
小説家のふたり

瑛彪・玄彪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小説家のふたり

【Nコード】

N2274B

【作者名】

瑛彪・玄彪

【あらすじ】

一風変わった二人三脚で小説を紡ぐ、ふたりの高校生。その足取りで、怪事件に挑む破目になる。果たして彼らは、犯人を突き止めることができるのか。事件の裏にある暴かれるべき真相は・・・？——推理モノというよりは「学園モノ」？只今休載中、もうしばらくしたら復活予定です。完結してから読むのをオススメします。

1。

ぽつぽつと、雨つぶが落ちてくる。
真つ暗な天から落ちてくる。

頼りなく点る外灯、
鬱蒼とした雑木林、
その中に埋もれている、黒い小路へ。

ぽつん。

家路を辿る赤い傘にも、雨つぶは落ちる。
硝子の珠が転がるように、雨粒は傘を滑る。滑り落ちて、傘を差している少女の髪の上で弾ける。

長い髪が、少女の歩みに合わせて揺れている。
この夜中にまだ制服であるところを見ると、学校か塾の帰りのようだ。・・・中学3年だろうか。
半袖の白いシャツから伸びる手は、片方に傘の柄、もう片方に通学カバンをしっかりと握り締めている。

雑木林からは、木々の葉に雨つぶの当たる音が響き合う。

女の子はどこまでも続く黒い道を。まっすぐに見つめている。
聞こえるのは自分の足音と、雨音のみである。

微かな雨音が林の中で響き合い、少女の心に黒いさざ波を立てる。

外灯が、真つ黒の海に光の島をつくる。

この光から、次の光まで。

光る飛び石を踏む心地で、彼女は家へと着実に歩を進める。

あと少しでお家だ。

あの暖かい温もりを思い浮かべると、自然と足が速くなる。と、その時、

風が吹いた。

何千何万という葉擦れの音が、彼女の足を止まらせる。

傘の陰から、辺りをうかがう少女。

路傍の木々は薄明かりの中で、瑞々しく濡れた若葉を揺らしている。光の届かぬ闇を背景に。

やがて、木々のざわめきが収まり、雨音だけの世界に戻る。

ほっと息をついて、少女は歩き始める。

ガサ。

不自然な葉擦れの音が響く。

少女の足が道路に張り付いた。

風は、吹いていない。

視界に入る木々も、揺れていない。

音を立てたのは、彼女の横の茂みだった。

早まる鼓動。

恐る恐る横に目をやる少女。

しかし、そこには、何の気配も感じられなかった。それきり音もない。

もともと、音なんて・・・しなかったかもしれない。
そうだ。きっと、気のせいだ。きっと――

自分に云い聞かせて、顔を前に向ける。

気のせい

気のせい

気のせい・・・

必死に足を動かす少女。

それなのに、彼女の足は、震えている。

あと少し

あと少し

あと・・・

再び、茂みが音を立てた。

続けて聞こえたのは、堅い地面で何かが潰れたような、湿った音。何かが道路に――彼女の後ろに着地した音だった。

彼女は弾かれたように走り出した。

ローファーがアスファルトに高く響く。

それを、粘っこい足音が追う。

おののく少女。

気が動転して、カバンも傘も握り締めたまま走る。

ひたすら走る。

走っているが、足音は近づいてくる。

荒い息遣いが迫る。

獲物を見つけた肉食獣のように、荒い息が。

ついに、少女の足がもつれた。

「あ」

小さな声を上げ、硬い地面に転倒する少女。

迫り来る足音が、雨に濡れた耳、地に着いた身体から伝わってくる。

恐怖で少女は凍りく。心臓だけが激しく動く。

彼女は振り向くことすらできずに、じっと、投げ出された自分の傘を見つめていた・・・

2、

彼女は振り向くことすらできずに、じっと、投げ出された自分の傘を見つめていた・・・

「いまいちな。」

青白く光るPC^{パソコン}の液晶。

ずらりと並んだ10p文字の最後尾に、^{ひびき}呟きのようなコメントが打ち込まれた。

「えーっ！？ どこに文句あんの、大和！」

画面を注視していた女の子が声を上げる。

コメントを打ち込んだ手がキーボードを鳴らして、それに答える。

カタカタ・・・カタッ

『そんなに熱くなるなよ。』

「熱くもなるわよ！ 今日一日かけてつくったんだから」

カタカタ・・・

『それでは、さらに良い作品になるように、僕から桜にアドバイ
ス。』

冷静にお聞きくださいませ。』

「・・・そうね、聞くわ」

女の子はおとなしくなった。

その隙に、大和の手はキーボードの上をすばやく動く。

カタカタ・・・タンッ

『ラスト、傘の効果がはつきりしない。』

「むっ、演出なの!」

カタカタ・・・

『息づかいが迫っているのに、』

カタカタ・・・カタッ

『こけた時にすぐ教われないのが不自然です。』

「むむっ、確かに・・・後で直す」

カタカタ・・・

『それに、校章が』

「あゝ、やめやめ！ やめ！！
大和、つつこみ多すぎ！」

大和が打ち終わる前に、女の子はぐぐつとのけぞって、目を閉じる。

「もう疲れちゃったあゝ……。ホットミルク飲みたあゝい」

『はいはい』

気まぐれな桜に慣れっこな大和は、返事を画面に打ち込んで、桜を乗せた車椅子を机からキッチンへ方向転換させる。

「もうちょつと右・・・」

乗せられている桜が大和に指示を出す。

大和はそれにしたがって、車椅子の方向を微調整する。

「よし、そのまま直進！」

桜の号令で発進する。

ゆっくりと回る大きな車輪が、所狭しと林立している本棚、クロ―ゼットの間をぬける。すると、すぐキッチンにたどり着く。ここはひとり暮らし向けのワンルームなのだ。

「右」

桜の声で、車椅子が右へキュッと方向を変える。

「正面、冷蔵庫」

大和の手が椅子の正面に伸びて、冷蔵庫に届き、扉をぱっと開ける。

冷気が、覗き込む桜の頬を撫でる。

「扉の裏左奥、牛乳発見！」

UFOキャッチャーのように、大和の腕が桜の指示で動き、牛乳パックを掴んで引き上げる。もう片方の腕が冷蔵庫の扉を閉める。

「左、直進、ストップ、右、流し・・・」

桜はひたすら指示を出す。

大和はそれに黙々と従って、作業する。

実は大和、目が見えない。

口も利けないし、耳も片方聞こえない。

桜の方は、手足を全く動かせない。

今見たように、桜が大和の目と口になり、彼が彼女の手足となつて、日々の生活を築き上げている。

物心ついたときから、ふたりはそういう風に暮らしていた。

大和は桜を介^{たす}けるために彼女を懸命に支え、桜は大和の光となつて彼を導く。それに加えて桜は、その勝気でお節介な性格ゆえに、大和の云いたいことを勝手に代弁している。

（おかげで大和の影がすっかり薄くなっているが、それで彼は満足である。）

ふたりは現在、通っている高校の向かいにあるアパートで、二人暮らしをしている。

牛乳とカップを、慣れた手つきで扱う大和。とくとくと、ミルクをたっぷり注いだカップを、レンジに入れて「あつため」のボタンを押す。ブウンとうなりを上げながら、レンジの皿が回る。

パンパンッ

大和がお尻をたたく。

「なあに、大和」

桜が顔を上げる。

今度は、大和は節をつけて叩く。

パンッ・タ・タ、タ・パパンッ・タ、パパンッ・タ・・・

信号だ。訳すと、『今何時?』。

「11時だよ」

また大和が叩きだす。

「わかってるわよ、もう。
ほどほどにしとくつてば」

桜がつんつと横を向く。

どうやら文句を云われたらしい。

それもそうだ。

今日は日曜。学校がないのをいいことに、朝からずっとPCに向かわさせられている。

学校に通うようになってからは、授業、宿題、はつきり云って、日常生活で手いっぱいであるのが本音だ。しかし、彼女には夢がある。

小説家になりたい。

遅^{たくま}しい想像力の翼で、自由に架空の世界を飛び回る彼女の口からは、次から次にアイディアが溢れ出す。それが現実世界に落とされてピチピチ跳ねまわっているのを、鮮度そのままにして言葉という手裏剣ですばやく打ちとめ、彼女でなくても理解できるように文にしていくのが、大和の仕事なのである。長く一緒にいて、お互いのことをわかっているからこそできる、巧妙な連携プレーなのだ。

日常では大和の考えをアウトプットしている桜だが、彼女の夢をかなえるとなると、今度は大和が彼女の考えをアウトプットする。

そのツールとして、PCは最適である。キーの配置を覚えてしまえば、まどろっこしい信号を使わなくても、意思疎通が図れる。

・・・と喜び勇んで始めたタイプだが、こんなに酷使されるとは・・・大和は根を上げそうになる。

あつたまつたミルクを持って、大和と桜はもといた部屋に戻る。
そこは、机と本棚、クローゼットとベッドが一緒に詰められているが、二人にとってはちょっとした書斎だ。

「んん」

桜が身をよじった。車を降りたいの合図だ。

大和は一旦カップを机に置き、桜を車椅子からベッドに移す。

「ミルク」

桜の顔に、カップを近づけた。

「んんっ、急につけないで！ 火傷しちゃう！」

ふーふーと桜がカップの中のミルクを吹く。

「いいよ」

ゆっくりカップが近づき、女の子の唇にくっつく。傾けると、雛のくちばしみたいな唇にミルクがつく。唇は、すするようにしてホツトミルクを飲む。

「ん」

カップが離れる。

「もうちょっと冷ましてから飲む。そこ、机の上において」

ベッドの横に机はある。手を伸ばして、大和はカップを置く。

大和の手が、てきぱきと空を動く。・・・手話だ。

（お前は、本当に、わがままだな）

「しょうがないじゃない、そういう年頃だもん」

桜が口を尖らせて答える。

（お前は、会った、とき、から、わがままだ！）

「じゃあ性格よ。あきらめて」

にこつと笑む。

「じゃあ、続きを書こう！」

（え〜、疲れたんじゃ、なかった、っけ？）

「私が役に立てるのはこれぐらいですから。頑張るぞ〜」

（結局、頑張るのは、僕じゃないか）

この調子だと明日は遅刻だ。桜は、8時間睡眠は絶対にゆずらない。

しかし、いったん云い出したら聞かないという、彼女の頑なな性格が身に染みている大和は、それ以上の抵抗をせずにPCに向かう。その画面を桜が覗き込む。

カタカタ・・・カタッ

『で、続きは？』

机の上のホットミルクが、微笑みを漏^もらすかのように、穏やかな湯気を立てていた。

3、

ここに、一人の男がいる。

すいじ たかひと
水字崇人。 23歳。

今、彼の眼下に広がるのは、賑やかな教室。

そして彼の目下の仕事は、自分のクラスの朝礼を行うこと。

これがなかなか大変なのだ。

一晩ぶりに会ううれしさ（？）がそうさせるのか、生徒が生き生きとお喋りをしている。これから朝礼が始まる雰囲気には、とても見えない。

彼自身も、朝礼前といったら、こう、はしゃいでいた気がしないでもない。

しかし、それは何年も前の話である。

立場が変わると、気分はこうも変わるのだな…。彼は痛感する。

彼の目指す職業は、高校教師。6月から一週間ほど、ここ、しいさ 椎西戸高校いどに教育実習に来ている。初めはぎこちなかった「学校」も、すっかり馴染んだ。馴染んだのはいいが…

「うあい！ 静かに！！」

ずっと教壇に立っている水字が、シビレを切らして口を開く。

「あれ、先生。指図によらない指導を目指すんじゃないの？」

すっかり水字に馴染んだ生徒の一人が茶化^{ちやか}す。

それは水字が、初めてこのクラスに来た時に云わされた「理想の指導」のことだ。

あの時の彼の緊張振りを思い出したのか、生徒の茶化しがうけたのか、明るい笑い声が響く。銘銘が自分の話に夢中になっていた生徒も、それに気付いて笑い、教卓の方に注目する。

「いつまでたつつつても、お前らが気付かないからだよ！」

「先生がそこに来てから、5分しか経ってないじゃないですか」

つい今しがたまで、喋っていた生徒が指摘する。

「5分も、だよ！」

気付いたなら喋るのやめろよな、全く……ってコラ、
沖野！遅刻だ！」

水字が誰もいない机に向かって叱り飛ばす。
クスクスと周りの生徒が笑う。

「いるのはわかってる、沖野桜！
どさくさに紛れて教室に潜り込むな！！」

水字が睨む空席の机の下から、ひょこつとふてくされた顔が覗いた。

やはり桜だ。

ずりずりと匍匐^{ほふく}前進して、水字に気づかれぬように着席するつもりだったらしい。

筋肉の持病があるとか聞いていたが、彼女のオテンバっぷりには舌を巻く。この間のお昼の時間には、水字がまさに食べようとしていたメロンパンにかぶりついて取り上げたし、クラス対抗ドッジボールの時にはボールをよけまくって内陣の最後の一人となり、我がクラスの全滅を防いだし、廊下は走る水字よりも速く車椅子で逃げるし……。

今回は典型的な遅刻逃れが失敗に終わり、桜はこの上なく不機嫌そうだった。

「朝礼がまだ始まってません」

ぶつすりむくれて水字を睨み返す。

「朝礼は云い訳にはならん。

朝礼ではなく、朝礼開始のチャイムに間に合わなければ遅刻だ」

「……云い訳ではなく、私はただ事実を述べただけです」

教室がどつと沸く。

やれやれ、とんだ屁理屈野郎だ……水字は頭を掻くほかなかった。

「ああ、もういい。とにかく席に着け。」

いい年した高校生がいつまでも床を這ってない」

水字が授業をするときには着かず離れず見守る担任は、朝礼・終礼になると水字に丸投げする。

生徒が水字に馴れるようにしたいのか、水字に荒波に揉まれる経験をさせたいのか、単にめんどくさいだけなのか。

いずれにせよ、担任がいない教室で生徒がハバをきかせて、水字が苦労しているのは確かだ。

水字は、すでに開いてある日誌を読み上げる。

「えゝでは始める。」

まず、夏休みの課外について」

ええゝもうかよゝゝ、と教室は騒然。また、収集が付かない状態になる前に、水字は続ける。

「国・数・英、習熟度に別れて行う予定だ。その習熟度とは・・・」
「今回の中間と期末で決まるゝ！」

「そうだ。例外的に本人の希望も取るが、あくまで例外だ。日頃の行いが肝心となる」

「先生の誕生日って、6月28日でしたよねえ？」

「賄賂は一切受け取らん！ 学業で示せ！ それに私はテストの時にはもういないぞ！」

「ちえゝゝ」

「しっかり準備して、しっかりがんばってほしい」

「しっかりが二回かぶったゝ」

「せんせえボキヤ貧んゝ」

こほん、と水字は咳払いを入れる。

「…では、次の連絡に入る。まじめに聞くように」

「テストはまじめに聞かなくてよかったの？」

「実際まじめに聞いてなかっただろうが。・・・ここ最近頻発している行方不明についてだ」

さすがに教室はおとなしくなった。

「昨年冬から、10代の学生の…中・高生だな、行方知れずが多くなっている。

今まで家出だとか、神隠しだとか騒がれていたが、ついに昨日、警察が誘拐事件として捜査を始めた。どうやら、同一犯の可能性が高いらしい」

ここで、一人の生徒が静寂を破った。

「なぜだ」

水を差す、というよりは、刺すような、鋭く冷たい声。

「ん、」

突然の不意打ちに、水字は一瞬間を空ける。

「疑問に思っるのは、誘拐事件とされたことか。それとも同一犯の可能性があることか」

尋ねながら声の主を見て、水字はまたびつくりした。生徒たちの反応も同じようだった。

聞いてきたのが、異常なほどめったに口を利かない生徒だったからだ。

名前は…高良といったか。

水字が彼の声を聞いたのは、これが初めてである。

「両方」

素っ気なく云った彼は、ウサギっ毛の茶髪をふわりとゆらして、窓の方を見る。真横を向くので、うなじまで見える。

「まだ、誘拐と決まったわけじゃない。

家出、その他より誘拐の疑いが強くなった、ということだ。

ここ最近行方不明になった子は、家出をするような動機が見当たらなかった。

それから、行方不明者の通学路付近で、似たような不審な男の目撃があつたり……」

水字が彼の質問に答えながら高良をちらりと見るが、彼は水字に、白いうなじを向けたままだった。

「…だったり、そういうことだ。

帰るときは、くれぐれも気をつけるように。

人気のないところで一人になるな。帰りも遅くならないようにしろ」

水字の話が一通り終わると、生徒たちは銘銘しゃべりはじめた。

「げ、こわっ」「そうは云つても、塾があるし…」
「ママンに迎えに来てもらつたら？」「るせい！」
「ねーねー、一緒に帰ろうよ」

そんな中、彼、高良は一人窓の方を見やつたままだった。水字のほうに顔を向けようもしない。

しかし水字の目には、焼き付けられていた。

高良が問うた瞬間、自分に向けた、凍てつくようなその視線が。

4、

朝礼終了のチャイムが鳴る。

ワンテンポ遅れて教室の戸が開き、生徒たちが出て来る。

移動教室なのか、皆、教材を持って、右に左に、銘銘の行き先に向かう。

その中に、車椅子の女の子が見える。

「ねえ、桜^{さくら}！」

ごみごみとした流れの中、明るい声に、その女の子が振り向く。肩にかかる髪を揺らし、パツチリとした目で見上げ、人混みの中から、彼女を呼んだ友人を捉える。

「なあに、彩子^{あやこ}？」

桜色の唇から、愛らしい声が発せられる。

しかし、その口調はちよつとキツめ。

彩子が、小柄ながらも生徒の群れをぐいぐいかき分けながら、桜のところへたどり着き、車椅子の前にしゃがむ。顔は満面の笑みだ。

「拓馬くんの声、聞けたね」

「だから何？ 興味ない」

桜は大和にくるつと踵をかえさせる。

「まあ、だからって、ひとりでさっさと行かないでよっ」

彩子が膨れる。

「だって、彩子は次、物理でしょ？
私、生物だし」

素っ気なく桜が云う。

「もう、いいじゃない」。

一緒の方向なんだから、一緒に行くのが普通でしょ」

「走って追いついてまで一緒に行くのが、
普通とは思えないけどなあ・・・」

チクチクと云いながら、笑顔になる。

結局は彩子と並んで廊下を歩く桜だった。

桜はわりと一人でいることが好きな性格である。

大和に本をめくってもらって読書したり、とりとめもない自分の空想を音声にし、文字として書き付けてもらったりすることが、彼女の一番の楽しみである。

したがって、「友達になろう」と接近してきて、自分の時間を奪う輩がキライである。勇気を持って話しかけてくれる子がいても無視か、不機嫌な対応をするだけである。
そんな気難しい性格だからクラスの誰とも仲良くなることはなかった。

彩子に会うまでは。

彩子はお節介でもなんでもなく、純粹に桜が気に入って、積極的に関わってきた。

奇跡的に、桜のほうも彼女を気に入った。ころころとした笑顔がかわいしいし、どんなに桜からいやみを云われようとめげないし、何よりも、常に前向きで、わざとらしくない明るい性格であるところが、一緒にいて気持ちいい。

ということで、桜の傍にいられる唯一の女子生徒は、彩子である。
・・・いや、もうひとりいる。

「桜あ、彩子お、おはよ〜」

鈴を転がすような声が響く。

すらりとした女の子が、長い髪をなびかせながら、廊下の向こうから歩いてくる。

「あ、雪枝^{ゆきえ}、おはよ〜」

彩子が手を振る。

雪枝も手を振りながら二人のところに近づき、桜と肩を並べる。

「桜、生物だよね。

一緒行こう」

ぶつと桜はむくれる。

そんな桜を見て、彩子はくすくす笑う。

「照れ屋さん」

「ちがわいつ」

ここ、椎西戸高校では、多くの高校がしているように、理科・社会・実技の授業時はクラスを解体して、選択科目別に分かれて授業を受ける。

そのため、理科の科目が同じ生物である加賀美と桜は、組は違いますが理科の授業は一緒に受ける。逆に桜と同じ組の彩子は、物理を選択しているので、違う授業である。

理科の授業時には、各科目の実験室に移動して、専任の教師の講義を聴く。

「めんどくさい」

大和に押されながら廊下を進む、桜がこぼす。

「なあに？ 人生？」

彩子がからかう。

「人生かあ、それもいい」

桜は、気の入っていない返事をする。

「で、ホントは何がめんどくさいの？」

黒目をくりりと向けて、雪枝が問い直す。

「単に、教室移動」

「そんなにめんどろ？ 私は気分転換になっていいと思うけど」

「理科や社会、美術の授業になるたんびに移動で、ややこしい」

「いどーめんどー！なんちゃって」

「くだらない。」

「そういえば、夏課外からはもつとめんどくさくなるわよ」

「あゝ、英数国もクラス解体だった」

「クラス崩壊！」

「いや、違うし。」

「くっさあゝ！」

廊下ですれ違つ生徒たちが、鼻や口を押さえて通り過ぎる。

「あ、そろそろ生物室だ」

「じゃあね、サクラ、ユキエ」

鼻を押さえながら、彩子が階段を上っていく。

桜の鼻を大和がふさぐ。

「もういい加減手を打ってほしいね、この悪臭」

「ほんと。いったい、この臭いは何なんだろう」

かよい雪枝に至っては、卒倒しそうな表情である。

「知りたいかい？」

このダンディ・ハスキーな声は・・・！
一斉に二人は振り向く。

「板谷先生！！」

七三分けでグレイの髪をきっちり決め、パリッとした白衣を着た老紳士が、爽やかな笑みを湛えて2人を見下ろしていた。

「やあ、沖野くん加賀美くん。元気そうで何よりだ」

「いや、その元気もここで尽きそう」

「どうにかしてください、この臭い！」

必死に訴える桜と雪枝に対して、板谷教師はのんびりと顎に手を当てる。

「その排水溝に何か詰まっているらしくってなあ」

「何が詰まっているんですか？」

「さあなあ……。一応手の届く範囲は掃除しているのだが、もっと奥のほうにあるらしくてなあ」

「業者に頼めばいいじゃないですか」

云い切った桜を（その前に大和が手話で抗議していた）、ほう、と云った目つきで見る。

そして笑い出す。

「はっはっは、云われなくとも、もう頼んであるよ」

「いつですか？」

一ヶ月前からこんな調子じゃないですか」

雪枝が恨めしげに板谷を見る。その一瞬、

？ 見間違いか。

桜は、板谷の笑顔に違和感を持った。しかしいくら凝視しても、今はいつもの板谷の笑みだ。

そんな桜のほうに、板谷がパツと振り返った。

「ほら、もう授業が始まるぞ。
入った入った」

板谷は笑いながら後ろに回り、雪枝の背中と、桜の車椅子をポン、ポン、と軽く叩いた。

5、

どこまでも続く樹木の群れ。

晴れた昼間なのに、重なる枝葉で光が届かない。

目の前の鬱蒼とした雑木林を眺めながら、一服している黒尽くめの男。

くわえているタバコを左手ではずし、ため息をつく。

ため息についてもなお、無精ひげが囲む赤黒い唇からは不完全燃焼のストープのように煙が立ち昇る。

地図上では林とあるが、これじゃあ森だな・・・

男は舌打ちして、短くなったタバコを足元に投げつける。

まだ濡れているアスファルトに触れた吸殻は、ジュツと叫び声を挙げて一回撥ねたつきり、おおなしく横たわった。

「久保さん、現場を汚しちゃ駄目ですよ」

男が振り向く。

五部刈りの男が近づいてくる。

厳つい体つきだが、顔は童顔で、瞳はきらきらと少年のようだ。

彼の背後に、地べたに這いつくばるようにして調査している鑑識たちの姿が見える。そしてその向こうには、再び林が迫っている。

「すまん、つい」

久保は長身をかがめて吸殻を拾う。

顔を上げると、男が携帯ケースを差し出していた。

礼を云って拾った吸殻を入れる。

「あれ、井口。お前も吸うのか？」

「いえ、」

五分刈りの男は微笑えむ。

「吸殻を見つけたら、拾うことにしているんで」

それを聞いて、久保は照れたように頭を掻いた。

それからハツと我に返り、咳払いをして真顔になる。

「目撃者は」

「見つかりそうにありません」

井口が悲しそうに顔をしかめて答える。

「なにせ人通りが滅多にないところで、それも夜になると通る人はまったくいないとかで、」

井口は手帳を広げたまま、空を見上げる。

両脇から覆いかぶさる木々の梢の隙間から、わずかに木漏れ日が差している。

「とても、こんなところには・・・」

「しかし、現に人がここを通った跡がある。そうだろう、井口」

久保が井口を鋭く睨む。

「人がいなければ、犯罪は起きない」

井口は云いかけたことばを飲み込んで、うなづく。

「これで何件目だ。いったい何人の犠牲者が出ていると思っているんだ。しかも、女子ばかりを狙う卑劣な犯行！ クソツ！！」

久保はダンッダンッと地団太を踏む。

そこへ2人の下に鑑識の1人が駆け寄る。

「確認が取れました」

井口がさつと手帳を開く。久保も落ち着き、鑑識の言葉に耳を傾ける。

「現場に残されたバックは、龍之宮^{たつのみや}中学のものです。中身やキーホルダーの類は全て持ち去られています」

「またか・・・っ」

久保の拳が、ゴキツと音を立てた。

「それから、傘は失踪した女子が昨日の朝家を出るときに持っていたものでした」

井口が手帳から顔を上げる。

「あの赤い傘か」

6、

下校のチャイムはとくに鳴り終わっていた。

校舎を出た桜と大和は、整然と並んだ下駄箱の林を抜け、湿り気を帯びたグラウンドに出る。

この学校は、玄関の前にグラウンドがある。

登下校する生徒は、グラウンドの端のフェンス伝いに歩く。

桜はここを通る時、決まって不機嫌になる。

身体を思うように動かせないことが不満なのではない。

下足箱から校門までの最短ルート、すなわちグラウンドの真ん中を通れないからだ。

グラウンドでは運動部の連中が活動している。

なぜ、自分が下校するのに回り道をせねばいけないのか。さつさと帰りたいのに。

桜はイライラする。

グラウンドを真っ直ぐ突っ切る歩道を作るべきだ。

全くこの学校は頭が悪い。

この学校が簡単に自分を解放したがない気がしてならない。

そんなことを思いながら、梅雨独特の熱気が漂うグラウンドの端を泳ぐようにして、校門に向かう。

「沖野さん」

だしぬけに名前を呼ばれて、はっと顔を上げる。
フェンスにもたれた人影が、こちらを見ていた。

「沖野桜、だな」

冷やかな声。

白いシャツに、白い肌。

軽やかに揺れる明るい茶色の髪。

あれは…高良？

「ええ、そうだけど…」

いきなりフルネームで呼びつけられて、さすがの桜もたじろぐ。

桜は、というよりクラスメイト全員が、今まで高良と口を利いた
ことさえないのだ。

ゆつくりと高良が桜に歩み寄る。

「お前の名前は？」

高良が大和を見て云った瞬間、桜は信じられないという顔で硬直
した。

「ん、どうした？」

拓馬がずいっと迫る。

その問いに答えたのは大和の方で、彼はゆつくりと指で宙に文字
を書いた。

や、ま、と。

「大和か。」

俺の名前は高良拓馬。

よろしく」

拓馬が大和と握手する。

呆氣にとられていた桜がやっと声を出す。

「大和に名前を訊いた人は、・・・ううん、話しかけた人は、あなたが初めてよ」

「初めて教室入った時から気になってたよ」

そっけなく拓馬が云う。

「俺を呼ぶときは、拓馬でいい

お前は大和でいいな」

大和は「もちろんです」と身振りで伝えた。

初めてできた友達に、喜んでいるようだ。

冗談じゃない、と桜は思っていた。

こんなおっかなそうな奴はなるべく関わりたくないというのが本音だ。

そんな桜に、拓馬は尋ねる。

「桜でいいな」

初めてしゃべって1分後にもう呼び捨てか！

いや、初めからこいつはフルネーム呼び捨てだった。

カチンツときた桜が云い返そうとするその時、
拓馬の手が彼女の頬にスツと伸びてきた。

「よろしく、桜」

彼女の目を覗き込む拓馬の瞳。
その刹那、桜はヒヤリとした。

こいつの瞳…

「いやか」

拓馬の声で我に返り、慌てて声を発する。

「あ、え、いや？」

桜は聞き返す。

「大丈夫だな。」

拓馬が笑む。

「ん？ だから…」

そうじゃなくて、と桜は云いかけて、口をつぐむ。

にっこり笑う拓馬。

だがその目はにっこりではなく、ほくそ笑んでいるのに桜は気づいた。

つまり拓馬は、彼女が「いやって何よ」と聞き返した意図を知りつつ、「いや、いいですよ」という承諾に取り違えたふりをして、呼び捨てを強行するつもりなのだ。

オノレ、そこまでして名前を呼び捨てたいのか……！！

驚愕、呆れ、憤怒が入り混じる桜の表情を眺めて、拓馬は心の底からにっこり笑う。

「さすが、桜。
じゃ」

拓馬はさつと踵を返して、校門へ向かう。

桜はそれを「何が『さすが』だ……！」と呼び止めようとしたが、

「桜っ！」

いきなり後ろから背中をはたかれた。

「わぁ……！」

桜は跳び上がる。

「びっくりした？」

「おいてった仕返しよ」

してやったり顔で、彩子がVサインをする。

「何が仕返しだ!!」

桜は拓馬への鬱憤を、彩子にぶつける。
振り返ると、拓馬の姿はもう消えたいた。

「そんなに怒んなくていいじゃん」

ね、さっき、高良くんいたよね。

何話してたの？」

物凄い剣幕の桜をさらっと流して、興味津々の顔で聞く彩子。

「別に!」

「何かあったの？」

何もなかったようには見えないけど」

じつと彩子に見つめられ、しぶしぶ答える桜。

「…向こうが自己紹介してきた」

「あら! うらやまし!!」

彩子が両手を胸の前で合わせる。

「高良くん、先月転校してきてから

一言も口利いてくれなかったじゃん?

今日初めて声聞けて感動した」!

そろそろ彼、打ち解けてきた頃なんじゃない?

きつと彼も誰かとしやべりたかったのよ。

桜、お近づきになるチャンスじゃない!」

「いやよ、あんな奴。近づきたくないわ」

桜は顔をしかめる。

「あの人、転校初日から変だったじゃない。

先生に促されても、挨拶ひとつしなかったでしょ」

「変かしらあ？」

彩子がつつとりと空を見上げる。

「ただ、シャイなだけなのよ。

彼、無口でクールじゃない？」

「彩子にかかる、むつつりスケベもクールになるね」

「違うもん！

彼は気品があるじゃん。

顔もとっても綺麗だし、、、」

ムキになって云い返す彩子に、ぶつ　と桜が吹き出す。

「見た目で云うなら、あんなの生意気なガキにしか見えないんだけど。」

体つきも、中学で成長止まっちゃったって感じだし」

「これから成長期って子もいるの！
それにしても……」

ふくれっ面の彩子は、またうつとり顔に戻る。

「今日彼がしゃべってるとこ、2回も見ちゃった♪
私、明日高良クンに話しかけてみようかな？」

その時桜の頭に、自分を覗き込んだ拓馬の瞳がちらついた。

「やめときっ」

声を荒げた自分に、桜ははっとする。

彩子が目をまん丸にして自分を見ている。

マズイ。相当きつい口調だったらしい。

「いや、それはその、お…」

云いよどむ桜に、彩子は微笑む。

「あゝ、そうなんだあゝ」

「？」

「大丈夫。

私が拓馬クンのこと騒いでるのは、ファンとしてだから。
応援するよ、桜」

「え。、違う！

そんなんじゃないから！！」

「照れなくっていいから！

まかせなさい！」

「違っつて云ってるでしょ！」

「キヤーツ、桜もやっぱり女の子ねー!!」

「もおお」

スキップしながら先に行く彩子を見ながら、桜は暗澹たる気持ちで校門をくぐる。

「何でこんなことばっかりなの……」

7、

こぼこぼこぼ……。

ポンプの泡が、水槽の水面みなもを揺らす。
揺らぐ境界線の下を、フナがゆったりと泳ぐ。

その、きょろりとした丸い目玉に、ぐるりと教室が映る。

白い壁に囲まれて並ぶ、白い机。
その上に並べられた実験道具をはさみ、2人一組で席についている生徒たち。

カリカリカリカリ……

彼らはひたすら、ノートにペンを走らせている。
時折顔を上げて見つめる先は、黒板。

そこに白墨の魔方陣のごとく図形と文字列を生み出しているのは、
白衣を着た老紳士、板谷だった。
彼は音も軽やかに、チヨークを躍らせる。

・・・コ、カツ、カツ、コ、コツツ。

一通り書き終え、彼は満足したように笑み、教卓上の小さな木箱にチヨークを入れる。

カタン。

後は、生徒が立てるせわしない鉛筆の音と、おだやかなポンプの音が、室内に響く。

（ああ、なんて静かなのだろう。）

板谷は、かすかな音に、じつと耳を傾ける。

鉛筆の音は徐々に収まりつつあり、顔を上げて彼に注目する生徒が増えてきた。

ころあいを見計らって、彼は切り出す。

「今日は、酵素について、勉強します」

ノートを取りきれていない生徒も、板谷に注目する。

「酵素とは、体内で起こるあらゆる反応を促進する、一種の触媒です。」

朗々と教室中に響き渡る声で、講義する。

「触媒とは、化学反応を速める物質です。しかし、自身は変化をしません。周りの物質だけが変化するのです」

「その変化する物質も、酵素の種類によって異なります。例えば、消化酵素」

板谷は黒板の図を指す。

そこには、簡単に、人間の消化器官が書いてある。

「私たちが吸収する大事な物質として、デンプン、たんぱく質、脂

肪があります。

しかしこれらは、このままだと大きな分子ですので、吸収されにくいです。

そこで、これらを吸収しやすい形にしてくれるのが、酵素なのです・・・」

「例えば、50kgのたんぱく質を分解するには、どれくらいの酵素の量で、どれくらいの温度が適切でしょう？」

「加賀美くん？」

「え、あの・・・わかりません」

「先生、」

挙手をした生徒を見て、教室中がざわめく。

本日2回目、いや、転校以来2回目の発言をした拓馬だからだ。そうした周囲の反応をよそに、拓馬は質問を続ける。

「なぜ、50kgなんですか」

すると板谷は、ふつと笑みを漏らした。

その笑みに、桜は嫌な引っかかりを感じた。

「ぱつと閃いたんだよ」

「そうですか、」

拓馬は挙げっぱなしにしていた手を下ろした。

「僕の考えすぎですね」

それ以降、
これが発言することではなく、
いたって普通に授業が行
われた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2274b/>

小説家のふたり

2010年10月10日04時27分発行